Meiji Gakuin Archives Newsletter

歴史資料館ニュースレター

明治学院は 2013 年
創立 150 周年を迎えます

2011. 3. 31　Vol. 2
明治学院歴史資料館発行

■ 目次

- 巻頭言　1p
  2010年度　歴史資料館講演会
- フルベッキ博士が明治日本に遺したもの　2p
  寄稿論文
- 「村田若狭の弟綾部」の出自について　4p
- フルベッキ博士関連歴史資料館所蔵資料　8p
- 寄贈図書等の紹介：沖野岩三郎関係資料　9p
- 2010年度購入図書（抜粋）　10p
  コラム
- 明治期世界に羽ばたいた明治学院卒業生　12p
- 新収蔵品紹介　12p
- 歴史資料館 2010 年度活動概略　12p

歴史資料館ホームページも是非ご覧ください。
http://shiryokan.meijigakuin.jp/

巻頭言：

学院の過去と現在の対話～歴史資料館の使命～

明治学院歴史資料館長　辻泰一郎

歴史資料館の年次報告を兼ねるニュースレター第 2 号を発刊することができるのはとても喜ばしいことである。本号の編集時期は丁度入学試験と卒業式の間であり、学院は学生・生徒たちを迎え入れ、また送り出す季節にあたっており、入学希望者、卒業年次生にとって人生の節目となるときでもある。

1859 年ヘボン、ブラウン、フルベッキが来日し、教育と宣教の事業に着手して、やがて明治学院が設立された。多くの生徒が学院に集い、巣立っていった。戦前の外地からの入学者も少なからずおり、師弟の共同体はすでに国際的な広がりをもっていた。外地に戻った卒業生たちの消息は、第 2 次世界大戦後、一旦途絶えたかにみえたが、学院の同窓会活動を通じて音信が復活し、旧交を温めるようになった。大学をはじめとして、現在学院は多くの国々から留学生を受け入れており、学院の国際的な人的ネットワークの輪は広がり続けている。

本年度の歴史資料館の活動として、フルベッキに関する守部喜雅氏の講演(本学キリスト教研究所・横浜プロテスタント史研究会と共催)をお願いすることが出来、併せて、明治期朝鮮からの留学生資料を歴史資料館資料集第8集(資料翻訳・解説　佐藤飛文東村山高等学校教諭、留学生一覧作成・解説　岡村淑美明治学院高等学校教諭)として上梓することになっていることは、学院に関わる日本の内と外との交流を確認することを意味し、学院の過去と現在の対話という意味も持っている。

現在鋭意企画が進展しつつある学院創立150周年の記念行事の一環として、学院関係者の人的、物的な事績の調査と保存事業が新たに歴史資料館の業務として加えられたことは、同じく付託されている『明治学院百五十年史』の編纂と並んで、学院の歴史的基礎を再確認する意味を持つのみならず、過去を問い直すことを通じて、学院の未来を構想するための確固たる基盤を据える意味を持つ。

学院の過去と現在の対話を深めていくこと、同時にそれを通じて学院の内と外を結ぶ架け橋になることは、当歴史資料館の重要な使命であると思う。努力していきたい。

平原　逸郎　画（記念館）

2010年度　歴史資料館講演会　　（2010年11月22日開催　歴史資料館講演会要旨）

フルベッキ博士が明治日本に遺したもの

守部喜雅（『百万人の福音』元編集長）

サムライとフルベッキ―「謎のフルベッキ写真」

ここに1860年代の長崎で撮影されたとされる集合写真があります。フルベッキとその一人の子どもを中心に40人あまりの武士たちが気迫の籠った表情で写っている一枚です。1907年（明治40）に大隈重信撰ということで出版された『開国五十年史・上巻』にも収められているものですが、後に、この写真には様々な風評が付いて回るようになりました。曰く、ここには、幕末維新を導いた西郷隆盛、坂本龍馬、勝海舟、伊藤博文、大隈重信、桂小五郎、高杉晋作といったサムライたちが一同に会している云々。そこから、これは「謎のフルベッキ写真」と呼ばれるようになり、近年になってもサムライたちの名前を一人一人記したコピーが出回って話題となっているものです。

ただ、最近の研究では、このサムライたちは1860年代に長崎に開設された英語伝習所でフルベッキに学んだ佐賀藩の志士たちというのが有力な説となっており、『開国五十年史・上巻』の写真説明も同じような内容になっています。

フルベッキは、1859年（安政6）、横浜、長崎、箱館（現：函館）の開港にともない来日したオランダ人宣教師です。先に来日していたヘボン博士やブラウン宣教師が神奈川に上陸したのに対し、ひとり、その年の11月7日に長崎に着き、現地にあった英語伝習所の教師として働きを始めています。1866年（慶応2）には、佐賀藩が長崎に設けた藩校の一つで英語塾である「致遠館」の教師にも選ばれました。ここで、フルベッキは、佐賀藩の大隈重信や副島種臣に新約聖書やアメリカ憲法を教え、特に、後に早稲田大学を創設し明治政府で外務大臣、総理大臣を歴任した大隈重信に与えた影響は大きく、「もし、大隈重信がフルベッキに出会わなかったなら早稲田大学も出来なかった」*と言われる所以です。

ですから、写真に写っているサムライたちが佐賀藩の武士だというのは説得力があります。しかし、後に、フルベッキが明治維新のリーダー達に出会い、日本の政治、経済、社会問題に大切な指針を示したことを考えるとこの写真にまつわる風評も少し別の意味を持って来るのかも知れません。

「宣教師」フルベッキ誕生―フルベッキの献身

フルベッキの本名は、ギドー・ヘルマン・フリードリン・ヴァーベーク（Guido Herman Fridolin Verbeck）。ユダヤ系オランダ人の彼は米国に移住後はヴァベックと改名、日本ではオランダ語音でフルベッキと呼ばれています。

1830年（文政13）、オランダの裕福な商人の家に生まれ、モラビアン派のクリスチャンの両親から信仰を継承され聖書の真理に堅く立ち魂の回心を重んじていたモラビアン派の学校で学びます。その当時、中国で伝道していた宣教師ギュツラフが語った世界宣教の熱烈な説教は少年フルベッキの心を強く捕えました。

フルベッキが生まれた年は、ヨーロッパに初めて鉄道が敷設された年で、彼は、ユトレヒトの工学校に学び、卒業後、鉄道建設に従事すべく22歳でアメリカに渡りました。1853年（嘉永6）には、アーカンソー州ヘレナの架橋工事の技師として招聘されますが激務と猛暑のため病に倒れます。この最も弱いと思える時に人生の転機がやって来ました。病床で、少年時代にギュツラフから聞いた「汝、すべてを神に委ねて外国伝道に献身せよ」という言葉がよみがえって来たのです。その時、フルベッキはこう祈りました。「もし、病気が治って再び立つことができたなら、私は生涯を外国伝道のために捧げます」。彼は宣教師となるべく、オーバン神学校で学び、アメリカのオランダ改革派教会が日本への宣教師を募集しているのを知るや、ただちに応募します。当時の日本はまだ、鎖国をしており、キリスト教も禁教の時代です。ただ、長崎だけはオランダとの通商が認められていた状況もありオランダ語が出来るフルベッキは貴重な人材だったと言えましょう。

ある家老の回心―村田若狭守とフルベッキ

時は、1854年（安政元）。3月には日米和親条約が締結され、それに遅れを取るまいと、10月には日英和親条約が締結されました。アメリカ艦隊は浦賀に来航しましたが、スターリング提督率いる英国東洋艦隊は9月に長崎に来航し長崎の港には緊張が走りました。

この重大事の時、佐賀藩家老・村田若狭守政矩は、ちょうど長崎に赴任していたのです。ある日、家臣が長崎湾に漂う小さな包みを見つけ拾い上げた所、中から出て来たのは油紙に包まれた横文字で書かれた本でした。オラ

ンダ語通訳に尋ねたところ、それは英語の聖書であることが分かりました。そこで、英語が読めない若狭守は、わざわざ上海から漢文の聖書を取り寄せ何とかその内容を知ろうとします。これは、フルベッキが長崎に赴任する5年前のことでした。

1862年（文久2）、若狭守は長崎でフルベッキというアメリカから来た宣教師が活動していることを知り、弟の綾部三左衛門を始め3人の佐賀藩の人材を長崎に送り込みます。長崎に着いた彼らはフルベッキに「聖書を教えて欲しい」と懇願します。それを聞いたフルベッキの喜びはどんなに大きかったか分かりません。この学びは4年間に及び、1866年（慶応2）、ようやく、若狭守は、長崎のフルベッキのもとを訪れたのです。

「私は長い間、心の中であなたを知り、語り合えるのを夢見てきました。神の摂理により。今日、実現したのは大変に幸せなことです」。そう、フルベッキに語った若狭守は、その一週間後に、弟の綾部と共にフルベッキの自宅で秘かにキリスト教の洗礼を受けたのです。しかし、当時は、キリシタン禁制の頃です。家老がヤソの洗礼を受けるとなると重い刑罰を覚悟しなければなりませんが、開明派の佐賀藩藩主の温情で、村田政矩が家老職を退き引退するという形を取ることで事を収めました。この村田政矩の回心から、村田の郷里佐賀郡久保田村には信仰者の群れができ、それが、現在の日本基督教団・佐賀教会の誕生へと発展したのです。

和装・帯刀した
村田若狭守政矩

（元明治学院大学名誉教授・故 高谷道男先生提供）

「お雇い外国人」フルベッキ―偉大なアマチュア

人生は出会いで決まると言われます。宣教師フルベッキが1866年、長崎の致遠館で大隈重信や副島種臣に出会ったことは、後に、フルベッキが明治政府との深い繋がりを持つきっかけとなりました。もちろん、それは、フルベッキが初めから願ったことではありませんでした。彼はただ、聖書の真理を一人でも多くの日本人に伝えたかっただけでした。ところが、大隈重信が仕えた佐賀藩だけでなく、薩摩藩、土佐藩などの志士たちが「致遠館」を訪れた結果、教師としてのフルベッキの評判は高まり、加賀藩主、薩摩藩主、土佐藩主、佐賀藩主、肥前藩主などから来藩の招請状を受けることになります。後に、これらの藩から、新しい日本を担う人材が輩出するわけですから、長崎のフルベッキはいつしか、中央政府にも注目されるお雇い外国人となったのです。

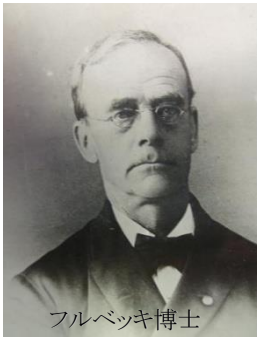
1869年（明治2）、東京の開成学校（東京大学の前身）の設立に尽力するよう政府から要請が来ます。その結果、開成学校の経営にも携わる教頭に任命され同時に明治政府の顧問として政府の外交政策のアドバイザーとして働くようになります。特に、この年フルベッキが大隈重信に渡した「ブリーフ・スケッチ」は、明治政府の外交政策に最も影響を与えた資料と言われており、1871年（明治4）、岩倉具視を全権大使とする欧米使節団が結成された時、その外交姿勢は「ブリーフ・スケッチ」を全面的に参考として決められたと言われています。注目されるのは、外交問題には全くの素人のフルベッキが、この指南書で、日本からの申し入れに対し外国はおそらく、こう反応するであろうから、その時には、こう説明をしなさい、と言った外交術まで伝授していることです。また、欧米使節団に、開明派の政治家ばかりでなく保守的立場の人材も加えることを進言するなど、政治力学を視野に入れたアドバイスは驚異に値します。

その学歴は土木工学を学んだに過ぎないフルベッキです。しかし、そのすぐれた語学力に助けられて、日本に入って来る外国からの知識を、まず最初に知りうる立場にあったことは大きな特権であったでしょう。しかも、彼は、その外国の知識を日本の指導者たちに的確に伝えることが出来る“伝達力”を兼ね備えてもいたのです。そして、なによりも働きの最大の動機として、やはり宣教師として日本人への愛が深く根底にあったことが、フルベッキをして、“偉大なアマチュア”たらしめたのではないでしょうか。

「宣教師」フルベッキ

明治政府のアドバイザーとしての任務を10年務めた後、1879年（明治12）、フルベッキは完全に宣教師としての働きに復帰、旧約聖書の翻訳事業ではヘボン博士らと共に翻訳委員に選ばれ、彼が訳した「詩篇」は珠玉の訳文として知られています。また、1887年（明治20）から10年間は、ヘボン博士につながる明治学院で聖書の真理を教え、日本の将来を担う人材の育成に務めました。

地上に残された10年というもの、フルベッキは、身を粉にして日本全国にキリストの救いを伝えるために伝道の旅に出かけました。「私は書くより語る方がうれしい」と語っていた彼です。各地で聖書の真理を、たくみな日本語で語る時ほど彼の充実した時はなかったのかも知れません。


フルベッキ博士

（明治学院歴史資料館蔵）

1898年（明治31）3月10日、「私の国籍は天にあります」という聖書の言葉の通り、この地上では国籍を持たなかったフルベッキは、赤坂葵町の自宅で、68年の波乱の生涯を終えたのです。（了）

* “フルベッキがなかったら、早稲田大学なく、建っても、勿論、ひどく形式的、精神の異なったものとなったであろう。”『早稲田大学百年史・第一巻』(第１編 序説東京専門学校創立前史第10章フルベッキ来朝　１信仰深きオランダ　)||９７頁||1978年||早稲田大学 大学史編集所||早稲田大学出版部

【守部喜雅氏略歴】1940年生まれ。慶応義塾大学卒業。1977-97年、クリスチャン新聞編集部長。99-2004年、月刊『百万人の福音』編集長。ジャーナリストとして、四半世紀にわたり、中国大陸のキリスト教事情を取材。著書に最新刊として『聖書を読んだサムライたち』他。

(講演会の様子:記念館１階小チャペル)

寄稿論文

「村田若狭の弟綾部」の出自について

平 幸治

一　はじめに

1859年(安政6)長崎に来航した宣教師フルベッキが、1866年5月20日(慶応2年4月6日)、村田若狭とその弟綾部に洗礼を授けたことは日本プロテスタント・キリスト教史によく知られている。

村田若狭は実名政矩。文化11年8月11日、佐賀藩深堀領の邑主鍋島孫六郎茂辰の次男として生まれ、同藩久保田領の邑主村田家を継いだ人物である。明治6年5月10日没。大正4年従四位を追贈された。

両家とも佐賀藩の重臣で、久保田村田家の家格は親類、深堀鍋島家は家老である。

若狭の事跡がよく知られているのに対し、弟の綾部に関する事跡は生没年を含めこれまでほとんど知られていない。本稿ではこの「綾部」の出自とその事跡について検討してみたい。

二　綾部の姓名

綾部に関しては、その姓名すら文献によって区々である。「綾部三左衛門」とする著述と「綾部恭」とする著述があり、さらに「村田綾部」として、あたかも村田を苗字、綾部を名前とする著作もある[1]。

綾部三左衛門と綾部恭は同一人物なのか。村田綾部との関係はどうなのか。どの事典類にも明確な説明は見当たらない[2]。

佐波亘編『植村正久と其の時代』(昭和12年12月)374頁には「其の弟綾部三左衛門と、外に親族のものも一緒に研究した」とある。

また山本秀煌編『日本基督教会史』(昭和4年10月)18頁には「次に信者となりし者は肥前佐賀藩の重臣村田若狭守とその末弟綾部恭の二人なり」とある。

そうして、比屋根安定著『日本基督教史』第四巻復興編(昭和14年7月)96頁には「弟である綾部三左衛門(恭)や親戚と共に研究した」とあるのを見れば、綾部三左衛門と綾部恭は同一人物に間違いなかろう。恭は三左衛門の実名(諱)か、明治以降の改名による戸籍名であろう。恭が一字名であることと通字から考えれば、おそらくは後者であろうと考える。

この時代の人物が何回か改名するのは普通のことであり、若狭も実名は政矩、幼名を慶吉郎、中頃は伊平太と唱え、さらに若狭と称した。

明治5年の太政官布告により、通称・名乗両様を使用してきた者は一名たるべしとされ、名前はひとつに限定された。そして右衛門・左衛門・兵衛などは改める者が多かったようであるから、三左衛門も戸籍名を「恭」と改名したものであろう。通常は最終名である恭と呼ぶべきであろうが、受洗当時の呼び名としては三左衛門が正しいことになる。

いま三左衛門が恭に改名したことを示す史料を見つけることはできなかった。しかしおそらく戦前の研究者にとって綾部三左衛門が綾部恭と同一人物であることは自明のことであったにちがいない。ただ、大隈八太郎が大隈重信であり副島次郎が副島種臣であるようには三左衛門と恭はすぐには結び付かない。事典類にはきちんと説明がほしい。

なお「村田綾部」とする著述は、『早稲田大学百年史』第一巻(昭和53年)などである。同書95頁に「この二人こそ、前述した村田若狭から派遣せられてきたのであった。村田は佐賀の支藩の多久の領主であって、大藩佐賀の家老を務めている。家老といえば藩の総理大臣格の重臣で、自ら軽々しく動けないから、実弟の村田綾部が、小出千之助とともに、遣米使節に随行して、先頃帰国したばかりで、外国の事情に接触していたので」とある。

しかし上の記述には以下のとおり検討すべき事柄がある。すなわち、村田若狭は佐賀藩久保田領の邑主であって多久領主ではない。また多久も支藩ではない。村田家の家格は親類であって単に家老と呼ぶのは正確さを欠く。さらに小出千之助とともに万延遣米使節に同行したのは、佐賀藩の支藩である小城藩士綾部新五郎幸佐であり、若狭の弟綾部ではない。

フルベッキ自身は日本人の氏名表記について「わずかの例外を除いてはすべて姓のみしか記されていない」という[3]。

彼が記述する「Ayabe 綾部」は苗字と考えられる。苗字の綾部にさらに村田という苗字を冠するのは如何にも奇異である。後述するように綾部三左衛門の氏名は「鍋島家文庫」の史料で確認される。綾部三左衛門（恭）の存在は明白である。

畢竟、村田を姓とし綾部を名とする「村田綾部」なる人物は存在しないのである。「村田綾部」とする表記は修正されるべきである。事典類にあってはなおさらである。

この点、『日本キリスト教歴史大事典』（1988年教文館）が、「綾部恭」を立項しておきながら、→（他の項目を見よ）として「村田綾部」を参照させ、他の項目の説明文でもすべて「村田綾部」でとおすのは、いささか不可解である。むしろ「綾部恭」を本来の項目として「村田綾部」を「綾部恭を見よ」とすべきではなかろうか。

三 「綾部」の出自

「綾部」は村田若狭の弟である。弟として想定されるのは若狭の養父政恒の子と実父茂辰の子である。養父村田政恒には常之助（恒公）と鉄之助（実名不詳）があるが、常之助は江副忠兵衛の養子となり、鉄之助は石川寛左衛門の養子となっている[4]。ふたりとも「綾部」ではない。しからば実父鍋島（深堀）茂辰の子か。

わたくしはこのほど鍋島報效会所蔵「鍋島家文庫」『佐嘉御系図』（㊢141　3）のなかに茂辰の子女として以下の記載を見つけることができた[5]。

（史料一）

同（＝妾腹）

某　　字鹿喜代　中比鹿之助　後三左衛門

一　天保五甲午年十二月廿一日生

一　産母

一　綾部一郎左ヱ門エ養子

上の『佐嘉御系図』はタイトルからは分かりにくいが深堀鍋島氏の系図であった。文化11年の識語があるが、その後も書き継いだらしく記事の最終日付は明治16年1月27日である。

上の史料から「村田若狭の弟綾部」とは、鍋島（深堀）茂辰の男子で綾部一郎左衛門の養子となった綾部三左衛門であることが確認できる。

出生は天保5年12月21日、諱と生母は記載がなく不明。上史料によれば茂辰には八男五女があり、若狭政矩は二男、三左衛門は八男である。前述山本秀煌編『日本基督教会史』にみえる若狭の末弟という記述とも一致する。兄若狭との年齢差は21歳もある。三左衛門が生れたとき若狭はすでに村田家の家督を継いでいた。なお「鍋島家文庫」『御家老系図』（㊢141　8）にも茂辰の男子として「某　鹿之助　初鹿喜代　天保五年甲午十二月二十一日生」の記載がある。

若狭と三左衛門の生家・深堀鍋島家の遠祖深堀氏は上総国を本貫とする鎌倉御家人である。建長7年、深堀能仲が肥前国戸八浦（現在の長崎市深堀町あたり）地頭職に補任されて以来この地に勢力を拡張して系を累ねた。天正15年、豊臣秀吉から海賊行為を咎められた深堀純賢が鍋島直茂に臣従するに及んで鍋島の姓を賜り深堀鍋島家が成立した。知行六千石、佐賀藩家老の家格を有し先手組大番頭、長崎港警備を定役とした[6]。

一方、三左衛門の養家綾部氏の祖は大治年中に肥前国養父郡綾部庄荘官職を継ぎ代々綾部城を居城として一族蟠距した。三左衛門の養父一郎左衛門は物成百八十三石五斗を給された佐賀藩士である。片田江に居住。鍋島監物組[7]。

四 綾部三左衛門の事跡

綾部三左衛門の事跡に関しては、「鍋島家文庫」につぎの史料がある[8]。

（史料二）『請御意　下』（㊢309　28）御備立方　文久二年十月九日

此通

英学之儀、当時長崎表ニも稽古方十分出来候由、就而者先般馬渡八郎始三人者被差越置候得共、当今必用之学問筋ニ付而者今又両人程被相増、左ニ書載之者共為伝習出崎被　仰付方ニ者有御座間敷哉

綾部三左衛門

嶋内藤吉弟　嶋内伊吉郎

右奉伺候（以下略）

（史料三）『内密書附并聞合書』（㊢023　34）文久三年亥年　御仕組所

長崎諷説書

当節長崎表諷説聞取候廉々左ニ

一　此度英国ミニユストル官神奈川表渡来ニ付英人之趣意如何ニ候哉亜人フルベツキ相尋候処、最前英国ミニユストル上海出帆之砌亜墨利加コンシユル江致内話居候者此度島津三郎一件ニ付無拠為取合せ神奈川表罷出、三ケ条願立、自然許容無之節ハ為船将空罷帰訳無之、相当之取合せも可致、去迚日本与致手切所存ニ而者無之、多分琉球を攻取可申、就而ハ薩州・助兵をも差出可相成、其砌同所ニ而宿怨相晴候覚悟之由、且又同所之義ハ容易手ニ入候積リニ御座候、其上ハ薩州よりも是非ニ取戻シ工面ニ可有之、其節過分之金子等受取右地相渡シ可申心得之由申聞候（以下略）

三月廿八日　　綾部三左衛門

（史料四）『深堀日記』（㊢023　42）慶応二年四月二八日条[9]

一　綾部三左衛門様御事、明廿九日より五卿為守衛宰府御越之旨ニ付、御仕成振御母堂様相伺候処、伺

通取計可然旨被仰出候ニ付、御肴壱折被差遣候、御使高浜貫一郎被相勤候、尤御使口上左之通
三左衛門様御事、五卿為守護今廿九日太宰府御越之旨承知いたし御苦労之御事ニ存候、全体致御招御離盃等可相整之処、御留主中与申、近来不勝ニ有之其儀不任心候、依之乍些少御歓之印、御肴壱折差遣候

これらの史料から綾部三左衛門に関してつぎの事跡がわかる。

(1)文久2年10月9日、嶋内伊吉郎とともに英学研究のため長崎行きの藩命を受けた。

佐賀藩における英学研究は、文久元年秀島藤之助・中牟田倉之助・石丸虎五郎に英学稽古の藩命が出され三人が長崎において英語を学習したことに始まるという。その翌年秀島と中牟田は病気のため英学稽古を中止し、かわって馬渡八郎と金丸知三郎が追加された。さらに同年10月綾部三左衛門と嶋内伊吉郎が加えられ、この五名が英学稽古にあたったのである。これら英学稽古は佐賀藩の海軍力増成の一環という[10]。

佐賀藩士がフルベッキのもとで英学を学んだことは1863年1月24日(文久2年12月5日)付フルベッキの書簡(1862年の年報)において彼のバイブル・クラスの様子が次のように語られている[11]。

もう一人の生徒はこの春以来出席しておりましたが、ハシカのため隣の藩の彼の家に余儀なく帰り、その後秋になって、他の二人の人を伴って帰って来ました。これら三人のものは、この港に英学研究の施設があるので藩主から派遣されて来たのです。

フルベッキがいう長崎にある英学研究の施設とは、安政5年長崎奉行所岩原屋敷に開設された英語伝習所を指すと思われる。英語伝習所はその後移転と名称変更を重ねた。慶応元年には済美館と改称され、フルベッキ自身教鞭をとった。明治元年には広運館となって明治政府に引き継がれ県立長崎中学校の前身となった。

三左衛門がなぜ伝習生に選抜されたのか等の経緯は不明である。キリスト教史では、多くの場合、若狭が自身の代わりに弟三左衛門を長崎に派遣したと説明される。たとえばグリフィスの『日本のフルベッキ』には次のようにある[12]。

若狭は更なるひかりと、詳しい教示を求めて弟を長崎に送ってきた。「偶然に」と言うべきなのだろうか。真実を探し求める者がフルベッキ氏を見いだし、彼の生徒となったのは(90頁)

たしかに若狭が実弟の三左衛門を藩庁に推挙した可能性は否定できず、若狭から聖書研究の密命を託されていた可能性も高い。しかし出崎そのものは藩命による英学伝習が目的であった[13]。

(2)文久3年3月28日、フルベッキ等から得た情報をもとに長崎の情勢を佐賀藩庁に報告した。

生麦事件をめぐる日英交渉に関する情報は佐賀藩にとって重大な関心事であった。佐賀藩では深堀詰下目付郡目付などが長崎における情報収集にあたっているが、三左衛門はフルベッキやフランス領事などから直接情報を入手して藩庁に報告している[14]。

外国人と直接接触できる立場を利用して諜報活動を行ったものであろう。彼は攘夷派浪士による外国人襲撃の情報を伝えて避難を勧めるなどフルベッキとは極めて親密な関係にあったらしい。グリフィスの『日本のフルベッキ』には次の記述がある。

バイブル・クラスには二人の若者がいて、その一人は村田若狭守の弟綾部であった(93頁1862年)
村田からの伝言を携え綾部がやってきて、危険な状況であるので避難するようにフルベッキ氏とその家族に警告した(99頁1863年4月)
フルベッキ氏が中国から戻った時、綾部は任務を帯びて長崎を離れていた(114頁)

これによれば、文久3年夏ごろまでは三左衛門は長崎にいたがフルベッキが上海から戻った同年秋には新任務のため長崎を離れていたようである[15]。 任務の内容はわからない。三左衛門の諜報活動がこの時だけだったのか以後も続いたかは不明である。

(3)それより3年後の慶応2年4月29日(1866年6月12日)には五卿警固のため太宰府に赴任した。

所謂8月18日の政変により長州に走った三条実美ら尊攘派公卿は、慶応元年太宰府に移され幕命により福岡・薩摩・佐賀・熊本・久留米の五藩が警固にあたった。その五卿(七卿のうち錦小路頼徳は病没、沢宣嘉は脱走)守衛のため太宰府へ赴任する三左衛門に対し深堀鍋島家から餞別として御肴一折を贈った。口上に「本来なら送別の酒宴に招待すべきところ」と言うように生家深堀鍋島家とは昵懇の間柄が窺える。

若狭と三左衛門が洗礼を受けたのはこれと同じ月の慶応2年4月6日(1866年5月20日)であった。フルベッキ自ら『日本プロテスタント伝道史』で次のように述べている。

1866年5月20日ペンテコステの日に、フルベッキ氏は、離れたところにあったあのバイブル・クラスの二人、すなわち肥前の藩主の筆頭家老村田若狭とその弟綾部三右ママ衛門に洗礼を授けた(62頁)[16]

史料四の『深堀日記』慶応2年4月19日条には「若狭様御事長崎御越之末御帰着之由ニ而御土産御到来ニ付、御母堂様差上置候事」と若狭帰佐の記事が見える。おそらく三左衛門も一緒に佐賀に戻ってすぐに太宰府勤務の任に就いたものであろう。

また深堀家の『御側日記』(㊟022 273)慶応3年正月5日条には新年招宴者に綾部三左衛門の名前がみえる。こ

のころには佐賀にいたらしい。

五 その後の綾部三左衛門

これまで見たように慶応2年ころまでは断片的ながらも綾部三左衛門の事跡をたどることができたが、彼の後年については管見の限り史料を見いだせない。

『日本キリスト教歴史大事典』には「後年東京に出て数寄屋橋（巣鴨）教会に加わったといわれるが、その後は不明」とある。

オーティス・ケーリの『日本キリスト教史　プロテスタント伝道編』によれば、1883年（明治16）頃、東京での集会に綾部がフルベッキを訪ね「洗礼を受けた後、自分は軍隊におり測量の仕事に従事していたが、その数年間いつも聖書を携え毎日読んでいた」と語ったという。また、その翌日15歳ばかりになる彼の娘を連れてきて彼女の受洗を乞うたこと、一時期綾部がメソジスト教会の地方伝道者であったことが記述されている[17]。

これによれば明治16年ころには東京にいたようである。ところで若狭の娘である「神代(くましろ)るい」は、明治13年5月6日長崎で受洗し同年9月大阪教会に移転したが同15年1月には長崎教会に復帰、さらに明治19年1月数寄屋橋教会に転会している[18]。東京でのるいと綾部恭とはおそらく信徒として交際があったものと考えられる。

六 結び

以上、村田若狭の弟「綾部」について「鍋島家文庫」史料によって、その生年と実父を確認し若干の事跡を示すことができた。しかし禁教時代の宗教的事跡は勿論、没年を含め後年のことはまだ不明のままである。今後も史料探索を続けていきたい。

【注】

1 （1）綾部三左衛門とする著作には以下のものなどがある。

・佐波亘編『植村正久と其の時代』昭和12年　復刻昭和51年　教文館

・比屋根安定『日本基督教史』第四巻復興編　昭和14年　教文館

・比屋根安定『日本基督教史　全』昭和24年　教文館

・G.F.フルベッキ　五十嵐喜和訳『日本プロテスタント伝道史』（日本基督教会歴史資料集七）1984年　日本基督教会歴史編纂委員会

同書訳文では綾部三右衛門であるが原著は Ayabe と姓のみを表記。また同書62頁の「三右衛門」は「三左衛門」の誤植であろう。

・西豊『長崎教会の草創期』上　2003年　キリスト教史談会

同書上巻76頁には「村田綾部三左衛門(のちに恭、村田若狭の弟)」とあるが2009年下巻123頁の上巻正誤表にて「村田を削除」と訂正した。

・坂井信生『明治期長崎のキリスト教』2005年　長崎新聞社　長崎新聞新書017

（2）綾部恭とする著作には以下のものなどがある。

・山本秀煌編『日本基督教会史』昭和4年　復刻版1973年　改革社

・高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』1978年　新教出版社（索引での記述）

・日本キリスト教団佐賀教会『創立百周年記念　佐賀教会史』1980年

なお同書中ワールド・アウトリーチ発行トラクト用リーフレットを引用した記述には「綾部三左衛門」とあるが同書には両者の関係を説明する記述はない。

・日本基督教団出版局『キリスト教人名辞典』1986年（村田若狭の説明文中）

・小林功芳『英学と宣教の諸相』平成12年　有隣堂

・高橋昌郎『明治のキリスト教』平成15年　吉川弘文館

・グリフィス　村瀬寿代訳編『新訳考証　日本のフルベッキ』平成15年　洋学堂書店

同書本文では原著に忠実に「綾部」と姓のみ訳出するが、編訳者作成の人名索引358頁には「綾部恭」とし「生没年不詳。通称三左衛門」とある。

（3）村田綾部とする著作には以下のものなどがある。

・『早稲田大学百年史』第一巻　昭和53年　早稲田大学出版部

・『日本キリスト教歴史大事典』1988年　教文館

・塩野和夫訳解説『禁教国日本の報道』2007年　雄松堂書店　東西交流叢書12

・末岡暁美『大隈重信と江副廉蔵』2008年　洋学堂書店

なお同書では村田綾部とするがその後のブログでは綾部三左衛門に訂正している。

・オーティス・ケーリ　江尻弘訳『日本プロテスタント宣教史』2010年　教文館

江尻訳は人名を『日本キリスト教歴史大事典』に準拠したため村田綾部の誤りを踏襲したが原著は Ayabe と姓のみの表記である。

・鈴木重正「説教　レジェンド・オブ・佐賀」『ぶどうの木　41号』2010年

2 『日本キリスト教歴史大事典』の「村田綾部」の項に「三左ヱ門と称した」とあるが、綾部恭との関係には触れていない。

3 前掲五十嵐訳『日本プロテスタント伝道史』172頁訳者あとがき

4 『村田家系図』（『佐賀県近世史料』第一編第九巻　平成13年所収）

5 「鍋島家文庫」の史料は財団法人鍋島報效会所蔵。佐賀県立図書館寄託。以下史料は「鍋島家文庫」である。なお文書名および請求番号は同文庫目録索引編による。

6 深堀氏および佐賀藩深堀領の歴史については拙著『肥前国深堀の歴史』平成14年　長崎新聞社　を参照願いたい。

7 『石高帳』（鍋島家文庫圖331　52）

8 史料二と史料三の存在は注10の岩松論文および注14の伊藤論文で知った。

9 この日記は深堀鍋島家の佐賀屋敷における日記である。

10 岩松要輔「幕末維新期における佐賀藩の英学研究と英学校」『九州史学』46号　1971年

同「佐賀藩の英学校致遠館」『西日本文化』81号　昭和47年（のち「英学校・致遠館」と改題改稿、杉本勲編『近代西洋文明との出会い』1989年　思文閣出版に所収）

なお岩松論文は綾部と嶋内の名前をそれぞれ「三右衛門」「伍吉郎」と読むが、史料原文の文字は「三左衛門」「伊吉郎」と判読できる。また綾部三左衛門については小城の綾部新五郎と

「同一人物かどうかはっきりしない」として経歴不詳とする。

[11] 前掲高谷編訳『フルベッキ書簡集』68頁

[12] 引用は前掲村瀬寿代訳編『新訳考証　日本のフルベッキ』による。以下同じ。

[13] 若狭ら受洗後の慶応2年5月3日には若狭殿家来本野周蔵が佐賀藩から長崎での英学伝習を命じられている（前掲岩松「英学校・致遠館」）。彼は「兼而英学心懸厚、諸課研究被罷在候ニ付、御舟方御雇ニして航海術且又通弁之義をも請持、為伝習長崎被差出置」とされたのである。本野周蔵（のち盛亨 天保7～明治42）は受洗以前の若狭が聖書研究のためフルベッキのもとへ佐賀から頻繁に往復させ、若狭らの洗礼にも立ち会っている。

[14] 伊藤昭弘「文久三年の佐賀藩」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』第2号　2008年
同論文では綾部三左衛門の「役職など不明」としている。

[15] フルベッキは1863年10月13日（文久2年9月1日）に長崎に戻り出島に居住した（前掲高谷編訳『フルベッキ書簡集』390頁）。

[16] 注1に述べたとおり原著は Ayabe と姓のみを表記。「三右衛門」は「三左衛門」の誤植であろう。

[17] Otis Cary, D.D ; A History of Christianity in Japan Protestant Missions Fleming H. Revell Company 1909

[18] 前掲『長崎教会の草創期』上　16頁21頁

付記　この拙い小論をまとめるにあたって高橋昌郎・五十嵐喜和・西豊・村瀬寿代・末岡暁美・佐賀教会鈴木重正牧師の諸先生には貴重な資料のご提供とご教示に預かり、小林功芳・明治学院歴史資料館小杉義信の両先生にはご教示いただいた。お名前を記して厚く感謝申し上げる次第である。

［2011 年 1 月 3 日記］

【平幸治氏略歴】

昭和 19 年長崎市に生れる。昭和 43 年九州大学法学部卒業。
同年都市銀行入行。銀行員のころから趣味として郷土深堀の歴史を勉強し現在に至る。

*お断り：「ニュースレター」への掲載にあたり、表記の一部を変更させていただいております。

【本論考寄稿の経緯について】

2010 年 1 月平氏より歴史資料館宛に 1 通のメールをいただきました。それは、「フルベッキが洗礼を授けた村田若狭守の弟、綾部（あやべ）について①村田綾部（村田＝姓、綾部＝名前）、②綾部恭、③綾部三左衛門とする著作があるようだが、秋山繁雄氏（元明治学院大学職員）が②とする典拠資料が見当たらない。資料館で分かるでしょうか」、との主旨のものでした。ご質問にお応えすべく、いろいろと資料にあたってみたのですが、「綾部恭」とする典拠資料を見出すことができず、こちらで分かった範囲のことのみを記してお返事を差し上げたのでした。

その後、こちらからの進展がないまま時が経過しましたが、今年に入って 1 通の封書が私の手元に届きました。差出人は平氏でした。早速に開封してみますと、本論考が同封されておりました。

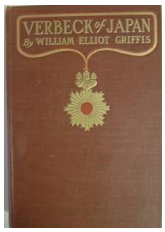
詳細に調査された結果をまとめられ、これを届けてくださったのです。一読し、私も大変勉強になったのでした。

本論考は、歴史資料館講演会の中でも取り上げられた村田若狭守政矩とも関連する内容であり、この論考を「ニュースレター」に掲載させていただきたい旨お願いしましたところ、快諾いただいた次第です。

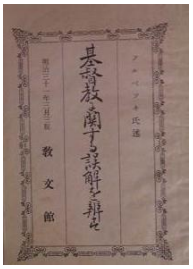
守部氏の講演要旨と併読いただけますと、フルベッキの働きについて、さらに深い理解をいただけるものと思われます。

（歴史資料館　小杉義信 記）

フルベッキ博士関連歴史資料館所蔵資料



『Verbeck of Japan』：フルベッキの伝記として、1900年に、W.E.グリフィスによって執筆され、ニューヨークのフレミング・H・レヴェル社より出版されました。グリフィスは、フルベッキの友人、また同僚としてその日常生活や仕事をつぶさに見ており、伝記を表すのに適任であったといえます。



『基督教に関する誤解を辯ず』：フルベッキが日本人のキリスト教に対する疑いと間違いについて、「基督教は西洋の宗教に非ず」「基督教は愛国心の妨害者に非ず」の二点に絞って、その考えを述べたものです。初版は 1896 年（明治 29）3 月、教文館発行。本書は 1898 年（明治 31）発行の第3版になります。

『速記叢書　講談演説集』：この本は、速記により採録した講談演説を翻刻出版して世間に伝え、併せて速記術の理解を深めようと意図して出版されたものです（全 5 冊のうち、第二・四・五の 3 冊所蔵）。第二・四冊にフルベッキの講演が採録されています。第二冊は 1886 年（明治 19）10 月に、第四・五冊は 1887 年（明治 20）4 月、共に丸善商社書店より出されました。

寄贈図書等の紹介

2010年度、歴史資料館では沖野佳子様（沖野岩三郎氏ご遺族）より頂戴した歴史資料館への指定寄付金および寄贈図書により、沖野岩三郎資料を充実させることができました。ここに感謝をもってご報告するとともに、皆様にご紹介いたします。

■購入資料

書　　名	出　版　社	出版年	備　考
白路を見つめて	大阪屋號書店	大 12	初版・箱付
人間なるが故に	大阪屋號書店	大 14	〃
赦し得ぬ悩み	福永書店	昭 3	〃
将軍吉宗外伝　紀南太平記（全 5 冊）	奥川書房	昭 17～18	初版
丘の一本杉	極東出版社	昭 23	〃
干支九星方位迷信に就て（「講演」第 328 輯）	東京講演會	昭 11	〃
大朝懸賞小説「宿命」と大逆事件（社内用）	朝日新聞社社史編集室	昭 37	〃
日本古代史と神道の関係	警醒社	明 40	初版
宿命	福永書店	大 8	初版・箱付
煙れる麻	警醒社書店	大 9	〃
地に物書く人	民衆文化協會出版部	大 9	〃
求め得ぬ嘆き	大阪屋號書店	大 15	〃
いづこへ行く	子供の教養社	昭 8	初版
平田篤胤	金の星社	昭 18	〃
平田篤胤とその時代	厚生閣	昭 18	〃
書き改むべき日本歴史　天皇の研究（全 4 冊）	金の星社	昭 24～25	初版・箱付
聖書物語	現代評論社	昭 22	初版
いづこへ行く	弘文社	昭 23	〃
どんぐり山	大阪屋號書店	大 14	初版・箱付
長篇童話集（山六爺さん　黒船物語）	國民圖書	昭 4	〃
童話の創作と実演	訓導生活社	昭 12	初版
悲みの極み	大日本雄辯會	大 14	初版・箱付
宿命論者のことば	福永書店	大 15	〃
手稿『金さんと順ちゃん』『マッチ買ひの少年』			自筆原稿
迷信の話	恒星社	昭和 12	初版・箱付
迷信の話	恒星社厚生閣	昭和 26	改訂版
八澤浦物語	金の星社	昭和 18	初版
宛名印記　美術と趣味の随筆集	日本出版配給株式会社	昭和 16	初版
魂の憂ひ	警醒社書店	大正 10	初版
生れざりせば	大阪屋號書店	大正 13	初版

■寄贈図書

書　　名	出 版 社	出 版 年	備　　考
正宗白鳥・沖野岩三郎	教文館	1975. 6. 30.	近代日本キリスト教文学全集：5
児童芸術講座	久山社	1990. 9. 10.	１：童話篇
世界立志物語　４０	名著普及会	1982. 4. 20.	復刻版　日本兒童文庫
内村鑑三を語る	岩波書店	1990. 12. 21.	内村鑑三選集　別巻
近代社会主義文学集	角川書店	1971. 9. 10.	日本近代文学大系：51

書　　名	出 版 社	出 版 年	備　　考
世界紀行文学全集	修道社	1971. 7. 30.	17：アメリカ　カナダ
世界紀行文学全集	ほるぷ出版	1979. 9. 1.	17：アメリカ　カナダ
日本児童文学大系	ほるぷ出版	1978. 11. 30.	11 楠山正雄 ； 沖野岩三郎 ； 宮原晃一郎
初期プロレタリア文学集	新日本出版社	1989. 3. 25.	日本プロレタリア文学集：2
大衆文学大系	講談社	1973. 10. 20.	30：短篇　下
伊香保みやげ	伊香保書院	1996. 10. 20.	大正 8 年出版本の復刻版
回想の内村鑑三	岩波書店	1956. 3. 26.	
迷信の話	恒星社厚生閣	1969. 12. 25.	
迷信の話	恒星社厚生閣	1951. 2. 5.	
新約聖書 ： 英和對照	米國聖書會社	1921. 11. 1.	
女性日本人	クレス出版		第 2 巻第 7 号；複製版

《沖野岩三郎》1876.1.5-1956.1.31 牧師、評論家、作家。1904 年明治学院神学部に入学。日露戦争下に学友賀川豊彦らと反戦行動をとる。1907 年、卒業。新宮教会に赴任。1910 年、大逆事件関係の嫌疑を受ける。1917 年、教会を辞し、日本ゆにてりあん協会牧師となる。大逆事件を暗示する「宿命」が『大阪朝日新聞』の懸賞小説に入選して文壇に出る。1920 年、協会を退き、以後、小説・評論・随筆・史論・児童文学の執筆と講演に専念。1945 年軽井沢に移り、伝道に専念。1955 年、浅間高原教会を設立、日本基督教団牧師に復帰した。『沖野岩三郎著作集』全 5 巻（1919）がある。〔日本キリスト教歴史大事典||教文館||1988 年より抜粋・転載〕

2010 年度購入図書（抜粋）

書　　名	執筆者名	出版年
ヘボンと恭助	瀧澤四郎	1929
宗教英詩十二講	阿部義宗	1932
求道の栞	大谷　虞	1901
基督教に関する誤解を弁ず	G.H.F.フルベッキ	1905
速記叢書講談演説集第二冊	林　茂淳	1905
速記叢書講談演説集第四冊	林　茂淳	1905
江戸切支丹屋敷の史蹟	山本秀煌	1924
主観経済の原理	賀川豊彦	1922
コロタイプ写真帖「日本の菊」初版	小川一眞	1905

書　　名	執筆者名	出版年
廟祝問答		明治初年
救拯学	井深梶之助	1905
桜の實の熟するとき	島崎藤村	1919
村の黄金夢	佐々木邦	1946
新撰ヴァイオリン曲集第1篇	北村季晴	
中等音楽教科書巻壱、弐、参	北村季晴	
御伽歌劇　ピョコ太郎	北村季晴	
啓蒙　天道溯原	フルベッキ/高橋吾良	1905
Hygienic Physiology	Joel　Dorman Steele	1905

書　　名	執筆者名	出版年
白金學報　第18号	明治学院同窓会	1907
白金學報　第20号	明治学院同窓会	1910
明治史料	宮武外骨	1927
脩心論	ヘボン	1895
白金學報　第21號	明治学院同窓会	1910
白金學報　第22號	明治学院同窓会	1910
白金學報　第23號　故ワイコフ先生紀念號	明治学院同窓会	1911
白金學報　第25號　ヘボン博士及びヘボン舘紀念號	明治学院同窓会	1911
白金學報　第26号	明治学院同窓会	1912
白金學報　第27号	明治学院同窓会	1912
白金學報　第29号	明治学院同窓会	1913
白金學報　第30號	明治学院同窓会	1913
憶ひ出の博言博士	イーストレーキ・ナオミ	1926
飯倉だより	島崎藤村	1922
基督友會五十年史	平川正壽編輯	1937
西洋諺草	岩見鑑造抄訳・子安峻校閲	1877
生命宗教と生命芸術	賀川豊彦	1922
日本に送る	岸　泰	1923
Brotherhood Economics	Toyohiko Kagawa	1936
聖フランシスコ・ザベリヨ	山本秀煌	1925
聖教史談	山本秀煌	1919

書　　名	執筆者名	出版年
信仰五十年史	田村直臣	1924
趣味の写真術	三宅克己	1905
速記叢書講談演説集第五冊	林　茂淳	1905
日本基督教会史	山本秀煌	1929
眞の神を信ずる理由	田村直臣	1897
十字架のものがたり	J.C.ヘボン	1873 頃
衛生宝鑰		1892
精神生活に於ける発見	賀川豊彦	1915
新約聖書約翰傳	ヘボン・ブラウン共訳	明治初期
新約聖書馬可傳	ヘボン・ブラウン共訳	明治初期
新約聖書馬太傳	ヘボン・ブラウン共訳	明治初期
新約聖書路可傳	ヘボン・ブラウン共訳	明治初期
試練に処する道	大谷　虞	1916
耶蘇教問答	井深梶之助	1907
Verbeck of Japan	W.E.Griffis	1900
A Maker of the New Orient SAMUEL ROBBINS BROWN	W.E.Griffis	1902
日本基督教会一覧　明治39	貴山幸次郎	1906
日本基督教会一覧　明治44	貴山幸次郎	1911
大正9年　日本基督教会年鑑	千屋　和	1920
小川一真コロタイプ写真帖「日本の有名な城と寺」	小川一眞	1898

歴史資料館では2010年度多数の図書・資料類を購入いたしました。これら資料等に関しては歴史資料館までお気軽にお問い合わせください。なお、この他にも、個人・大学・各研究機関等より種々ご寄贈いただきましたが、今回紙面の都合により掲載は割愛させていただきました。

コラム　明治期に世界に羽ばたいた明治学院卒業生

◆歴史資料館に米国在住の方からメールを頂戴しました。用件は、その方の大伯父様にあたられる方についての問い合わせでした。その方のお問い合わせにお答えする中から明治期に世界に羽ばたいた、一人の明治学院卒業生の姿を知ることとなりました。◆その方は、古川笈夫さん。1902 年明治学院普通学部卒業、1905 年には高等学部を卒業されました。その後、すぐ米国に渡られ、1 度も帰国されることなく、1974 年かの地で亡くなられました。上段の写真は在学当時の記念写真。前列、右はじが古川さんです。後列には、当時の明治学院の教員が写っています。◆古川さんは米国では Frank Takeo Flucawa と名乗られ、インディアナ州ニューカッスルで造園業を営み、Flucawa Flower Garden を経営されました。下段左の写真は 1944 年に撮影された奥様 Grace さんとの写真。下段右は 1968 年の古川さん。◆古川さんは日本のユーモア作家の代表的人物として知られる佐々木邦と同級生で、最晩年に古川さんと交わされた数通の書簡（邦の“絶筆”とも言える）が残されており、それらがこのたび古川さんのご子孫から寄贈されました。◆こうして、明治学院から世界に羽ばたいていった方が明治時代におられたことを知るとき、日本では“無名”ですが明治学院が育てた「世界人」の姿を思わずにはいられません。

（歴史資料館　小杉義信記）

新収蔵品紹介　　精錡水くすり瓶

◆歴史資料館展示室には“精錡水”看板（元明治学院大学職員・前田薫氏寄贈）が展示されています。◆“精錡水”は、岸田吟香がヘボン博士からその処方を教授され、自らが経営する賣薬業「楽善堂」から発売した目薬です。以降、いろいろな薬局から精錡水の名で発売されたようですが、今回紹介する瓶は「本家本元」で販売されていたものです。◆未使用のものと思われ、コルク栓がきちんとされたママになっている珍しいもので、横 2.1 センチ、上部直径 1.4 センチ、高さ 6.6 センチの大きさです。もちろん目薬の液体自体は気化してしまっています。◆“精錡水”については「引き札」や新聞錦絵などの広告紙、他の薬舗から発売されたものなどもあるのですが、これらもいずれ入手したいと考えています。

《正面》
「精錡水」の文字

《裏面》
「岸田吟香」の文字

《側面》
「吟香の目薬」の文字

〔稲垣昌芳氏（昭 52 大経卒）寄贈〕

＊なお、楽善堂発信の注文ハガキも併せて寄贈いただきました。

歴史資料館 2010 年度活動概略

■展示会:

史料でたどる明治学院の歴史

- 入学記念展示会　4 月 1, 2 日（大学）、8 日（高校）
- 2010 年度校友の集い　10 月 23 日
- 東京都文化財ウィーク展示会　11 月 1, 2, 3 日

明治学院の歴史にふれてみませんか？

- 戸塚まつり（横浜校舎）　5 月 30, 31 日

賀川豊彦パネル・史料展

- 第 40 回同窓会ホームカミング　11 月 14 日

明治学院の歴史　ヘボン博士没後 100 年記念

卒業記念展示会　2011 年 3 月 9 日（高校）、17, 18 日（大学）

■歴史資料館講演会:11 月 20 日　　講演者:守部喜雅氏

『フルベッキ博士が明治日本に遺したもの』

＊キリスト教研究所・横浜プロテスタント史研究会共催

■歴史資料館交流行事

- 明治学院中学校 1 年生訪問　9 月 15 日
- 大学生協教職員交流会（南部エリア）　10 月 10 日

■オープンキャンパスでの展示会開催

- 白金校舎:7 月 18 日, 8 月 28 日, 2011 年 3 月 26 日
- 横浜校舎:8 月 7 日

発行者:明治学院歴史資料館長　辻泰一郎
発行年:2011 年 3 月 31 日
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37　電話・ＦＡＸ:03-5421-5170